

## 19世紀前半におけるフランスの知識の普及書 (3)

Les Livres destinés à la diffusion des connaissances en France dans la première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle (3)

小山美沙子

Misako KOYAMA

### はじめに

本稿は、『名古屋外国語大学論集』第3号において、研究ノートとして発表した「19世紀前半におけるフランスの知識の普及書(2)」<sup>1)</sup>の続きである。筆者は、フランスにおける19世紀前半の女性のための知的啓蒙書出版の背景の把握のために、当時の知識の普及書出版の概況についても調べを進めており、先の研究ノート(1)及び(2)では、当時の書物の出版状況、知識の普及書の興隆、読者層を意識した知識の普及書の出版に焦点を当てて概略を示した後で、そうした知識の普及書の在り様を、「総覧の野心と簡明さ」、「版型と挿絵」、「叙述スタイル」という観点から光を当てて概観した。最後に本稿では、前世紀にもあった男女用の知識の普及書についても言及しておきたい。

### 男女用の知識の普及書について

サロン文化の開花した17-18世紀、男女のある程度の知的共通基盤の上になり立つこのような交際社会の存在が、Fontenelleの*Entretiens sur la pluralité des mondes* (1686)やDemoustierの*Lettres à Emilie sur la mythologie* (1786-1790)に代表される、社交界の男女を対象にした知識の普及書の出版を促すことになったと考えられる。しかし、社交界の男女用に止まらず、Nolletの*Leçons*

*de physique expérimentale* (1743-1748) の例に見られるように、18世紀、両性の極若い読者のために、更には、*Encyclopédie de la jeunesse* (1799 ou 1800) のように両性の子供向けの百科事典まで登場し、知識の普及書の裾野が広がりを見ることになった<sup>2</sup>。これらは、未来の社交界人士のために、あるいは、学校教育の不備を補うと同時に学識への趣味を育成するにはうってつけの教養書である<sup>3</sup>。

19世紀前半においても、FontenelleやDemoustierの書の人気は衰えず、再版され続けたが<sup>4</sup>、この時代、男女の読者を想定した様々な知識の普及書が新たに出版されたという事実も、指摘しておかなければならない<sup>5</sup>。

## 1. 女性読者誘引装置のある書

ところで、序文やタイトルで女性読者を対象とする意図が明記されていなくとも、知と積極的に関わる女性の姿が口絵や挿絵に描かれていたり、そうした女性の登場人物が対話の中で登場したり、女性宛の書簡形式であれば、それらは暗黙のうちに女性読者を呼び込む装置となりうるであろう。前世紀には、Nolletの*Essai sur l'électricité des corps* (1746) やEulerの*Lettres à une princesse d'Allemagne* (1768-1772) の例があった<sup>6</sup>。

先の研究ノート(2)で例示した女性宛ての書簡形式も、対話形式の書も(但しBretonの*Les Savans de quinze ans* (1811)を除く<sup>7</sup>)、副題を含むタイトルや序文に、女性読者についての言及はない。しかし、Madame Gorsasの*Les Veillées d'une mère* (1848)では、両性の子供達が対話に登場するし、他の書簡形式の書は、女性宛である。女性の読者は、自身をMathildeやThémireに重ね合わせて書物を読むことになるだろう。

一方、Montémont (1788-1862)の天文学の普及書、*Lettres sur l'astronomie* (4 vol., 1823)は、宛名の無い書簡形式の書であるが、少なくとも、初版の第1巻には、「Descartes enseigne l'astronomie à la reine Christine de Suède, qui l'avait attiré à la cour」という説明と共に、その様子を示す口絵があり、第2巻の表紙には、「Voltaire lisant des vers sur l'astronomie à la M<sup>is</sup>e Du Châtelet」という説明付きの挿し絵がある<sup>8</sup>。17世紀と18世紀を代表する科学の女性愛好家が、それ

ぞれ男性を介して天文学の手解きを受けながら天文学に親しんでいる様子を示すことで、男性による天文学についての文学的な味付けをした書簡を通して、女性が天文学に親しむことを促しているとも取れるであろう。

とりわけ、複雑な数式を避け、Demoustierの神話の普及書同様、詩句を交えて文学的な味付けを施した書簡形式そのものが、女性読者をも念頭に置いていると読者は感じたはずである。もっとも、Montémontは、序文で女性読者に関する言及を特にしておらず<sup>9</sup>、宛名のない書簡にも、特に女性に向けた特別な恭しさがあるわけでもない。

しかし、当時の書評は、「L'auteur des LETTRES SUR L'ASTRONOMIE a voulu mettre cette belle science à la portée des gens du monde, des femmes mêmes<sup>10</sup>」と書かずにはいられなかったのであった。こうした形式の普及書が、前世紀同様、社交界の男女に歓迎されたことは、疑いがないであろう。

## 2. 両性用表示の書

さて、暗黙の内に女性の知への接近を促すのではなく、明確に両性用であることが、タイトルなどに明確に示されているものも、新たに出版され続けた。

例えば、前世紀にもあった、子供や青少年向けの両性用の知識の普及書としては、Girard de Propiac<sup>11</sup> (1759–1823) の *Histoire de France à l'usage de la jeunesse* (1808)<sup>12</sup> や、*Plutarque, ou Abrégé des vies des hommes illustres de ce célèbre écrivain* (2 vol., 1804)<sup>13</sup> がある。いずれも、タイトルの下に、「Ouvrage élémentaire destiné à l'usage des jeunes personnes de l'un et de l'autre sexe<sup>14</sup>」と、男女用であることが明記されている。

前者は、「Les instituteurs, les institutrices, et sur-tout [sic] les Mères de famille qui, éloignées des villes, soignent elles-mêmes les premières études de leurs enfants<sup>15</sup>」が、本書を使って両性の子供を教育することが期待されているのである。これは、1820年に第4版<sup>16</sup> (Parisでの出版申告部数は1,000部) が出ることになる。

一方、後者については、1811年版の表紙に、「Adopté pour les Bibliothèques des Lycées」、1822年の第4版と1826年の第5版 (Parisでの出版申告部数は2,000

部)の表紙に、「adopté pour les Bibliothèques des Collèges」とあり、国の中等教育施設で採用され続けた<sup>17</sup>。

学校教育制度の進展を見るこの時代、タイトルに「学校用」という記載を入れる男女用の知識の普及書もあった。例えば、前世紀にもあった子供用の百科全書的な知識の普及書の系譜に属す、Masselinの*Nouvel abrégé de toutes les sciences, ou Encyclopédie des enfans, à l'usage des maisons d'éducation des deux sexes* (1820)<sup>18</sup>や、M<sup>me</sup> Boniface-Guizotの*Leçons de botanique, à l'usage des jeunes gens des deux sexes* (1837)<sup>19</sup>がその例で、いずれも、少なくとも第2版の出版が確認されている。

特に、タイトルの下に、「Ouvrage approprié aux maisons d'éducation」とある後者は、1837年10月10日付で、上級初等学校用の博物学の分野の認定図書となった<sup>20</sup>。本書の序文によると、著者は、「l'éducation de jeunes demoiselles」を取り仕切ることになり（詳細な事情は明かされていない。）、植物学を教えることにしたが、彼女達に与える適切な書物がなかったことが、本書の執筆のきっかけであったと語られている。本書は、「maisons d'éducation des deux sexes」の教育に相応しくなるよう著者が努めたものであるが、自身の生徒達に、「une étude qui, non-seulement [sic] ornât leur esprit, mais qui pût aussi nourrir leur cœur」をさせたいという彼女の真摯な意図や、本書が「d'autres jeunes personnes」にも有益でありうるという信念が、序文に示されており、女子の教育を特に意識しているのが感じられる<sup>21</sup>。

一方、初等教員の手引書や、初等教員志願者用の能力資格試験用のマニュアル本においても、男女用として出版されるものがあった。例えば、初等師範学校用の認定図書となった、Matterの*Nouveau manuel des écoles primaires, moyennes et normales, ou Guide complet des instituteurs et des institutrices* (1836)<sup>22</sup>や、1839年に第7版が出ることになるMartinの*L'Indispensable des écoles primaires, ou Guide des insituteurs et des institutrices, pour l'enseignement de la langue française* (1832)<sup>23</sup>は、男女を問わず、初等教員に必要な基礎的知識を提供するものである。

又、男女の初等教員志願者のための能力資格試験のマニュアル本につい

ては、Lévi-Alvarèsらの*Nouveaux Eléments méthodiques des sciences exactes et naturelles à l'usage des jeunes gens et des jeunes personnes, rédigés sur les programmes universitaires pour servir aux examens et brevets d'Instructions de tous les degrés* (1843)<sup>24</sup>がある。Lévi-Alvarèsは、7月王政時代に教職を志す女子のための公開講座を組織した人物であり、本書が、女子の志願者をも、読者としてはっきり意識して書かれたことは間違いない。

事実、序文において、彼は、「en faveur des postulants et des postulantes, nous avons recueilli avec soin les questions intéressantes qui ont été adressées pendant une année entière, à l'Hôtel-de-Ville et à la Sorbonne, dans les examens publics, et dont notre ouvrage renferme les solutions<sup>25</sup>」(下線は本稿筆者による。)と、「postulants」という男性形の中に女性志願者を埋没させることなく、わざわざ女性形「postulantes」を併置しているのである。

この他、実際的な知識の普及書として、法律や特に保健・医学の分野での男女用の実用的な手引き書や助言の書もあった。例えば、Valpêtreによる*Manuel de santé, ou Moyens simples et faciles de traiter soi-même dans les maladies qui ne réclament pas la présence d'un médecin* (1824)<sup>26</sup>は、この後に、「ouvrage utile aux pères et mères de famille; [...]」(下線は本稿筆者による。)などと読者対象が示されている。この、素人向けの簡明な家庭医学の書は、第2版の序文によると、初版(出版申告部数は不明)は、すぐに売り切れたという<sup>27</sup>。第2版は、2度に亘ってParisで出版申告がなされ、計4,000部に及んでいる。

一方、梅毒に対する、男女用の対処療法の書、*Conseils aux deux sexes, sur l'art de se guérir de la maladie vénérienne* (1821)<sup>28</sup>というもののまで出版された。これは、Moucelotが、「maladie vénérienne」が、「si répandue de nos jours」であるのに、なおざりにされている現状を憂えて<sup>29</sup>、薬剤師としての経験を活かして助言を施したもので、1830年には、増補改訂版である第2版が出る。

法律の分野では、Daubantonの*Code de famille, du mariage et des époux* (1805)<sup>30</sup>があり、婚姻と、これによって生じる民法上の効果についての解説書である。タイトルには、男女用の記載がないが、少なくとも序文において、「Ce code sera pour eux [les maris, les femmes]<sup>31</sup>」とされていることには注目したい。

こうした両性の読者を想定している書には、少なくとも、本稿筆者が知る限り、前世紀の知識の普及書には見られた特に意欲的な女性啓蒙の意図が序文で表明されている例がほとんど見当たらなかったという事実を認めねばならない。抑制不可能な女性の学問熱に配慮して、女性の知への接近を序文で声高に擁護する時代では、もはやなかったのである。

とはいえ、同時に、女子教育(初等教育)も、後れ駆せながら、少しずつ制度が整い始める時代であり、特別なコメントなしに「両性用」とすることは、場合によっては、それほど不自然ではなかったとも言えよう。尤も、「男女用」という表示は、少しでも多くの購読者を獲得するための商業上の利益を期待したとも考えられるであろう。

しかし、いずれにせよ、この「両性用」の看板が、多くが男性の手による書物の前で接近をためらう女性達にも、明らかな呼び込みのメッセージになっているということだけは、確かである。

## 終わりに

19世紀は出版文化が花開いた時代であるが、パリの国立図書館にある出版報や国立古文書館の出版申告台帳を調べていると、とりわけ7月王政時代以降(特に1840年代から)の出版量が膨大なものになっていったことがわかる。事実、世紀前半、前世紀の再版ものの比重が徐々に低下していき、新しい出版物が続々と世に出たのであるが、啓蒙の時代の洗礼を受けた知識の普及書の出版は、前世紀の波及効果であるかのように発展を遂げるのである。

前世紀の知識の普及書の在り方を継承する中で、男女用の知識の普及書も、前世紀の再版ものに限らず、新たな出版物が出てきた点には特に注目するべきであろう。

Napoléonの登場で幕を開けた19世紀前半は、女性を限定的な知へ囲い込む女性神話の強化、それを反映するかのような女子の公教育の進展の遅れもあり、女子の知への接近の在り方にはネガティブなイメージが付き纏ってきた。しかし、サロンの復活や18世紀精神の刻印を受けた女性達の活躍が見られた時代、前世紀の女子の知育擁護論や男女用の知識の普及書、女性のため

の知的啓蒙書の再版<sup>32</sup>に加えて、その内容は一様ではないものの、女性の知への接近を促す知育擁護論も新たに登場して来るのである<sup>33</sup>。そうした中で、新たに男女用の知識の普及書や女性のための知識の普及書が出版されても不思議はない。後者については、筆者が特に注目してきた現象で、調べを継続していきたいと思っている。

## 註

- 1 本稿筆者による研究ノート(2)については、『名古屋外国語大学論集』第3号(2018年7月、第187-202頁)参照。これは、研究ノート(1)(同第2号、2018年2月、第213-227頁)に続いて発表したものである。
- 2 17-18世紀の男女用の知識の普及書については、拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書(1650-1800年)に関する一研究』(溪水社、2010年)の第3章参照。
- 3 女性読者をも念頭に置いた教養書出版の背景には、商業上の意図もあったはずであるが、当時の女性の学識を擁護する考えがあった点が重要である。この点については、上記註2の同書第2章参照。
- 4 19世紀前半に再版された男女用の知識の普及書の例についても、上記註2の同書第4章参照。
- 5 19世紀前半における女性読者も念頭に置いた教養書出版の背景を考える上で、当時も存続していた女性の知育擁護の考えを理解する必要がある。この点については、拙論「19世紀前半のフランスにおける女性観と女子の知育擁護論」『紀要』第44号、名古屋外国語大学、2013年2月、「19世紀前半のフランスにおける女子教育論に見る知育擁護の言説」(1)~(3)、『紀要』第45~47号、名古屋外国語大学、2013年8月~2015年8月参照。
- 6 上記註2の前掲書、第89頁参照。
- 7 Bretonの書では、序文に、「J'ai désigné par le titre même, non-seulement l'âge de ceux qui sont les principaux personnages de mes petits dialogues, mais des jeunes gens que j'ambitionne particulièrement d'avoir pour lecteurs. Ce n'est pas qu'il soit hors de la portée de lecteurs d'un âge plus tendre, ni au-dessous de personnes plus avancées dans la carrière de la vie, notamment des dames et des gens du monde. Je me suis efforcé de me faire comprendre de tous [...]»(下線は、本稿筆者による。)とあり、若い人達を主たる読者対象としているが、男女の幅広い読者層が念頭にあったと思われる。
- 8 MONTÉMONT (Albert), *Lettres sur l'astronomie, en prose et en vers*, in-18, 4 vol., Lelong, 1823参照。第1巻の表紙と、第2巻の口絵、及び、残りの巻の口絵と表紙には、そうした女性を登場させていない。本稿筆者が参照し得たバリのBibliothèque de la Sorbonne所蔵の第2版(1826年)の第1-2巻には、地球儀を手にする天文学のアレゴリーとしての女性が描かれている。第3版(●1838年\*)は、現物を確認できなかった。本稿筆者所蔵の第4版(1859年)には、口絵や表紙の挿し絵はない。

尚、本書の表紙に、「membre de plusieurs sociétés savantes」とあるMontémontは、文筆家

で(英国人の家庭で住み込みの家庭教師もしたことがある。)、詩作品やScottの小説の翻訳書などを出版している。(Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle, X, p. 499他参照。)

\* 出版年の前に付した「●」は、これまでの研究ノート同様、出版報に掲載された年代である。

- <sup>9</sup> 読者を意識した言葉としては、「Les hommes ressemblent, la plupart, à des enfans qui veulent être amusés; je m'estimerais heureux et bien dédommagé de mes efforts si ce faible ouvrage pouvait leur inspirer quelque peu d'intérêt et réveiller le goût d'une science beaucoup trop négligée» (2<sup>e</sup> éd., tome 1, Peytieux, 1826, pp. XXXVIII-XXXIX)とあるだけである。
- <sup>10</sup> *Bulletin universel des sciences* [par Baron de Férussac](février 1824) in MONTÉMONT, *Lettres sur l'astronomie*, 4<sup>e</sup> éd., Ledoyen, 1859, p. 3. 引用文中の下線は本稿筆者による。
- <sup>11</sup> Catherine-Joseph-Ferdinand GIRARD DE PROPIACは、貴族の出で、作家であった。オペラコミックや小説の他、若い人向けの様々な教養書も手掛けた彼は、「un littérateur instruit et possédant plusieurs langues» (*Biographie universelle ancienne et moderne*, tome XXXIV, tome 34, Madame C. Desplaces, p. 407)であったという。
- <sup>12</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Histoire de France à l'usage de la jeunesse depuis l'établissement de la monarchie jusqu'au 1<sup>er</sup> janvier 1808; Avec des leçons explicatives de chaque règne et de chaque époque intéressante de cette histoire*, in-12, viii-664 p., Gérard, 1808.
- <sup>13</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Plutarque, ou Abrégé des vies des hommes illustres de ce célèbre écrivain, avec des leçons explicatives de leurs grandes actions*, in-12, 2 vol., Gérard, 1804.
- <sup>14</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Histoire de France...* (1808)、及び *Plutarque...* (1804)参照。
- <sup>15</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Histoire de France...*, 1808, p. viii.
- <sup>16</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Histoire de France de la jeunesse depuis l'établissement de la monarchie jusqu'au 1<sup>er</sup> juillet 1820; Avec des leçons explicatives de chaque règne et de chaque époque intéressante de cette histoire*, 4<sup>e</sup> éd., in-12, 2 vol., Gérard, Alexis Eymery, 1820. 本書第4版にも、両性用であることが同じく明記されている。
- <sup>17</sup> GIRARD DE PROPIAC, *Plutarque...*, 3<sup>e</sup> éd., in-12, 2 vol., Gérard, 1811; 4<sup>e</sup> éd., in-12, 2 vol., Gérard, 1822; 5<sup>e</sup> éd., in-12, 2 vol., Gérard, 1826参照。第2版は、現物を確認できなかったが、1806年の同じ著者による *Le Plutarque des jeunes demoiselles* (Gérard)の扉の左頁に第2版の広告があり、「adopté pour les Collèges[sic] royaux」とあり、第2版以降、国の中等教育施設で採用されたものと考えられる。尚、この第2版の広告では、「ouvrage élémentaire, destiné à l'usage des Jeunes Gens」とあるが、それ以外の再版版は、全て初版同様、両性用であることが明記されている。
- <sup>18</sup> MASSELIN (J.-G.), *Nouvel abrégé de toutes les sciences, ou Encyclopédie des enfans, à l'usage des maisons d'éducation des deux sexes; Ouvrage mis dans un ordre plus méthodique, et contenant un Cours complet de Mythologie, de Géographie et d'Histoire, une Instruction pour se former dans l'art d'écrire des lettres, un Traité d'arithmétique, l'Exposition du nouveau système des poids et mesures, un Tableau de la valeur des monnaies des principaux états du monde, et des notions claires sur les Sciences, les Arts, et principalement sur l'Histoire Naturelle, la Chimie et la Physique, orné de trois Cartes, Mappemonde, Europe et France, et de neuf Planches contenant cent figures*, in-12, frontispice, x-564 p., pl., A, Delalain, 1820. これは、問答形式による初歩的

な総合学習書である。

Masselin (生没年不詳) は、本書の表紙に、「ANCIEN CHEF D'INSTITUTION」とあり、私立学校で教育に携わっていた人物と思われる。フランス国立図書館は、彼の編著による地理や、作文、文法、神話などの学習書を所蔵している。1820年版のParisでの出版申告部数は、1500部で、1835年に第2版である *Nouvelle Encyclopédie des enfans, ou Abrégé de toutes les sciences* (in-12, x-624 p.)が出た。しかし、第2版では、特に「両性用」という表示はなされていない。

<sup>19</sup> BONIFACE-GUIZOT (M<sup>me</sup> C.), *Leçons de botanique, à l'usage des jeunes gens des deux sexes, ou Instructions sur le règne végétal, présentées à l'esprit et au cœur*, in-12, XII-348 p., pl., Prudhomme, Grenoble, 1837. 本書は、1840年に第2版が出た。著者名は、本書表紙の記載に従った。フランス国立図書館の所蔵カタログによると、Guizotは、結婚前の姓名で、Madame Bonifaceが正式であるようである。

<sup>20</sup> *Liste officielle des ouvrages autorisés pour les écoles primaires depuis la réorganisation de l'Instruction jusqu'au 1<sup>er</sup> septembre 1850*, p. 29 参照。

<sup>21</sup> BONIFACE-GUIZOT, *Op. cit.*, pp. VII-XII 参照。引用の中にある «leur» は、「mes élèves」を指す。

<sup>22</sup> 註1の研究ノート(1)の註48参照。

<sup>23</sup> MARTIN (Charles), *L'Indispensable des écoles primaires, ou Guide des instituteurs et des institutrices, pour l'enseignement de la langue française*, in-12, xvi-134 p., impr. d'Auguste Delalain, 1832. Martin (生没年不詳) は、初版の表紙の記載によると、「fondateur et rédacteur du Journal de l'instruction publique, la Revue élémentaire; membre de différentes sociétés savantes et maître de pension」である。教師であるとともに、教育界での啓蒙家であったと考えられる。フランス国立図書館は、他に、彼による初等学校用のフランス語文法、フランス史などの普及書、国語辞典などを数多くの著書を所蔵している。

尚、本書は、初等学校におけるフランス語教育の手引き書であるが、他に、初等学校での度量衡の男女教員用の教授手引き書として、P. Chabrol (生没年不詳。以下の書の表紙に、「Maître de pension」とある。) の *Le Guide des instituteurs et des institutrices pour l'enseignement du calcul décimal* (in-12, 212 p., L. Aubanel, Avignon, 1839) といったものもある。Chabrolの書の巻頭には、「Le Recteur de l'Académie [de Nismes]」から著者宛てに、本書の有用性を認め、推奨されるに値する旨の書簡が掲載されている。

<sup>24</sup> LEVI-ALVARES (David), VACHER DE BALEINE (A.), *Nouveaux Eléments méthodiques des sciences exactes et naturelles à l'usage des jeunes gens et des jeunes personnes, rédigés sur les programmes universitaires pour servir aux examens et brevets d'Instructions de tous les degrés; contenant 1° L'Arithmétique, 2° La Cosmographie, 3° L'Histoire naturelle proprement dite, 4° La Géologie, 5° La Physique élémentaire, 6° La Chimie usuelle, avec l'indication des ouvrages à consulter, des tableaux synoptiques à faire, des auteurs qui se sont fait un nom dans les sciences, accompagnés d'un questionnaire spécial*, in-18, viij-432 p., l'auteur, (1843).

共著者の Vacher de Baleine (生没年不詳) は、本書の表紙の記載によると、「Professeur, Auteur de plusieurs ouvrages d'instruction, Membre de l'Université」である。本書には出版年代の記載がなく、表紙には、フランス国立図書館によるとと思われる、「1843」というスタ

ンプが押してある。尚、出版報では、1844年の1月20日付けで登場する。(Bibliographie de la France, 20 janv. 1843, p. 31 参照。)

<sup>25</sup> LEVI-ALVARES, VACHER DE BALEINE, *Op. cit.*, p. vii.

<sup>26</sup> VALPÊTRE (Joseph-Ch.), *Manuel de santé, ou Moyens simples et faciles de traiter soi-même dans les maladies qui ne réclament pas la présence d'un médecin; ouvrage utile aux pères et mères de famille; aux voyageurs; aux habitans de la campagne qui ne sont pas à la portée des médecins, ou n'ont pas les moyens de les appeler; et généralement à quiconque veut se traiter soi-même dans les cas où cela est possible sans danger; précédé de quelques préceptes généraux sur la conservation de la santé, et suivi d'une notice sur la pulmonie et la régime à suivre par les personnes affectées de la potirine*, in-18, xii-90 p., l'auteur, 1824. Valpêtre (生没年不詳)は、初版の表紙には、「médecin」とだけあったが、第2版の表紙では、「médecin et directeur d'une institution de jeunes gens, Sceaux, près de Paris»(*Ibid.*, 2<sup>e</sup> éd., Jh. Moronval, 1826)とある。

<sup>27</sup> *Ibid.*, 2<sup>e</sup> éd., 1826, p. vi 参照。

<sup>28</sup> K. W\*\*\*[MOUCELOT (J.) ], *Conseils aux deux sexes sur l'art de se guérir de la syphilis*, in-18, 179 p., Moucelot, pharmacien, 1821. 初版では、表紙に、「par K. W\*\*\*」と、匿名の著者が記載されているが、第2版では、実名が記されている。Moucelot (生没年不詳)については、第2版の表紙には、「Pharmacien de Paris」と肩書きが記されており、出版元も、「Pharmacie de l'auteur」となっている。(MOUCELOT, *Conseils aux deux sexes sur l'art de se guérir de la syphilis*, 2<sup>e</sup> éd., Pharmacie de l'auteur, 1830 参照。)

<sup>29</sup> «Préface de la première édition» in *Ibid.*, 2<sup>e</sup> éd., pp.VII-VIII 参照。

<sup>30</sup> DAUBANTON (Antoine-Grégoire), *Code de famille, du mariage et des époux , ou Recueil de tous les articles du Code civil relatifs aux formalités du mariage, aux actes et procédures auxquels il donne ou peut donner lieu, aux droits et effets qu'il produit, aux actions qu'en résultent quant aux époux, à leurs enfans et aux autres, réciproquement*, in-8°, viij-224 p., Testu, 1805. Daubanton (1752–1813)は、治安判事(juge de paix)で、既に、18世紀、民事に関する普及書(読者の性別に関する言及はない。)、*Code du divorce et de l'état civil des citoyens* (in-18, 167 p.)を出版しており、1793年に第2版が出ている。この他、*Dictionnaire du Code civil* (1806)などの法律辞典を出版しているが、特に女性読者に関する言及はなされていない。

尚、*Code de famille*は、後に、*Traité complet des droits des époux l'un envers l'autre et à l'égard de leurs enfans, de la puissance maritale et paternelle, de la minorité et des tutelles* (in-8°, xvij-648 p., Crapelet, 1810)とタイトルが変更される。しかし、本書は、「les époux」用であるから、これも男女用と考えられる。

<sup>31</sup> DAUBANTON, *Code de famille*, p. vij.

<sup>32</sup> 本稿の註1で示した拙著の第4章参照。

<sup>33</sup> この点に関しては本稿の註5で示した一連の拙論参照。